



協定締結を喜ぶ白石町長と石山まつまえ町長。「いざというときには、お互いに助け合いましょう」



災害に備えて松前で連携

大規模災害時における相互応援協定書締結式

松前町と北海道松前町は5月17日、北海道松前町民総合センターにおいて、地震、原子力や気象などの大規模災害時に相互に支え合うため、「大規模災害時における相互応援に関する協定書」を締結しました。締結式には、白石町長と三好議長が出席。締結を終え、石山英雄まつまえ町長は「遠く離れた姉妹都市に災害が発生した場合、今回の協定により迅速な応援体制をとることができます」と話す、白石町長も「南海トラフ巨大地震で、松前町は震度6強の揺れになるといわれています。日本列島のどこで、どういう災害が起こるか分かりません。万が一のときには、お互いに助け合うことができるよう備えていきたいです」と話し、協定締結を喜んでいました。この協定により、松前町、まつまえ町のどちらかに大規模災害発生時には、被災者の受け入れ、物資・資器材の提供、職員派遣などの相互協力が、迅速に行われるようになります。



風水害に備えて訓練

松前町消防団・自主防災組織合同水防工法訓練

平成25年松前町消防団・自主防災組織合同水防工法訓練は、5月19日、雨が降りしきる中、徳丸の二輪車公園西にある重信川左岸堤防で行われました。

訓練には消防団、自主防災組織や松前消防署など約450人が参加。開始に先立ち白石町長が「これから台風などにより、松前町でもどのような災害が起こるか分からない。大雨も局地的に降るかもしれない。常に危機意識をもって、訓練してほしい」とあいさつすると、参加者は、一斉にロープ結索訓練に取り掛かりました。その後も、土のうを作ったり、積み重ねた土のうをブルーシートで覆ったりして、浸水を防ぐ工法を実演。風水害による被害を最小限に食い止めるために、技術の習得だけでなく、消防団と自主防災組織の連携を深めました。

訓練後、松原署長は「消防団と自主防災組織が連携し、先輩から教えてもらいながら、防災能力を向上して欲しい」と総括しました。

前回に引き続き参加したという新立自主防災組織会長の仲島政夫さんは、「消防団の人に、増水による床下浸水を防ぐ土のうの積み方を教えてもらいました。私の家の両側は川になっているから、とても役立ちそうです」と話していました。



④工法の基本となるロープワーク。迅速・簡単・確実が求められる ⑤消防団から自主防災組織に、浸水を防ぐ土のうの積み重ね方をアドバイス ⑥消防団・自主防災組織が結集



震災について学ぶ

平成25年度統括広報委員視察研修

各地区の区長で構成する統括広報委員会は、4月18、19の両日、大震災への備えをテーマとして、兵庫県神戸市の「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」を訪問し、視察研修を行いました。人と防災未来センターでは、防災・減災体験フロアや震災追体験フロアなどを見学しました。そこで、世界で起こっている自然災害と実験を通して防災や減災についての知識を学んだり、「1.17シアター」で阪神・淡路大震災後の様子を大型映像と音響で体感し、まち並みが再現されたフロアを見歩き、震災の恐ろしさを再認識したりしました。

また、当時消防職員だった語り部の体験談を聞きました。「備えるだけでは不足。検証や訓練こそが大切。大地震直後は、消防車も、救急車も、救助隊も来ないという最悪の事態を想定すると、自助と共助が非常に大切になってくる。日ごろからできる限りの備えをして、災害に見舞われたときに慌てないようにすることが大切」との話を聞き、自助と共助の大切さを学びました。



④人と防災未来センターでの研修の様子 ⑥語り部の話を真剣に聞く統括広報委員の皆さん ⑤自身の震災体験談を話す語り部。自助と共助の大切さを教えてくれた

レポート



大西 淳弘さん
松前町区長会長
恵久美

視察研修へ行った日の、つい1週間前にもマグニチュード6の地震があった淡路島を通り、神戸市にある「人と防災未来センター」を訪れました。そこで、防災・減災フロアや震災追体験フロアで悲惨なパネルや生々しいビデオなどを見学したり、語り部による体験談を聞いたりしました。

語り部による体験談は次のとおりです。

- ①自分の命は自分で守れ
減災で1番大切なことは自助
自助の次は共助
公助は3日後くらいから動き出す
- ②火災は住民の協力がなければ、消防だけでは対応できない
消防は道路がふさがれ進めない
消火栓は使えず、防火水槽が役立つ
- ③倒壊家屋などの下敷きになっている人を助けるのは、まず住民である
- ④余震のある中で人命救助は2次災害なども含めて難しい
- ⑤倒壊した家屋の住民は、倒壊した家にも自身の安否と連絡先を貼っておくことが大切

- ⑥まとまりのある地域は、安否確認や食事の配布もスムーズである
- ⑦ボランティアの人は、衣食住は全て自分が用意し、被災元に迷惑をかけないことが大切

昨年は、和歌山県有田郡広川町の津波防災センター「稲村の火の館」で、津波被害から大切な生命や暮らしを守る方法を学びました。これに引き続き、今年はこの研修を通して、防災への意識を新たにすることができ、今後起こるだろう我が郷土の大震災に備えて、知識や心構えを学ぶことができました。好天にも恵まれたこの研修は、実り多いものとなりました。



松前の良さを伝えるために 松前町文化協会がかかるたを町に贈呈

松前町文化協会は5月8日、協会設立30周年記念事業の1つとして制作した「松前え〜とこ60選かるた」200セットを松前町に寄付しました。

贈呈式では、満田泰三会長が「松前を宣伝するために役立ててほしい」と話しました。白石町長も「このかるたは、時代の古いものから新しいものまで取り上げられており、松前町の60年間の動きが分かって楽しい」と笑顔でかるたを受け取りました。

贈呈式後、松前幼稚園に移動し、園児がかかるた遊びを楽しみました。園児たちは、園長先生が札を読むと、松前の名所が描かれている絵札から読まれたものを目を凝らして探し、元気いっぱいに札を取り合っていました。かるた遊びに参加した泉莉緒ちゃん＝筒井＝は「1枚取れた。楽しかった」と話していました。

かるたは、町内の小中学校などへ配布し、さらに町外の人へ松前町を宣伝していくために活用します。



①満田会長(右)と白石町長(左)
②③かるた遊びを楽しむ松前幼稚園の園児たち



作兵衛翁の遺徳をしのんで 平成25年度義農祭

享保の飢饉の際、後世に麦種を残すため、自らの命を犠牲にした義農作兵衛の遺徳をしのぶ義農祭は4月23日、義農公園で開かれました。

式典では、白石町長が「最近では、自分さえ良ければいいという利己的な考え方や行動が多い中で、私たちのまちには、ひと粒の種を大切に、自分より他人を思いやる義農精神が息づいています。それは、まちの未来を思いやる育みのこころであり、種から芽が出て、新たな実りをもたらすように、この精神を受け継ぎ、人もまちも豊かに育つよう全力で取り組んでいきます」と述べた後、参列者が献花を行いました。

式典終了後、特設ステージでは、餅まきや舞踊のほか、松前小の児童による義農太鼓や伊予万歳などが披露され、訪れた人を楽しませていました。

また、町内をはじめ伊予市や砥部町で生産された海産物や野菜などを即売する「ふるさと市」が実施され、大勢の人でにぎわいました。



①義農太鼓を披露する松前小の児童たち
②宗意原保育所の子どもたちも献花
③大盛況の餅まき



差別のない社会を目指して 2013 明るい人権の町づくり大会

明るい人権の町づくり大会は5月11日、松前総合文化センターで行われ、約500人が参加しました。

人権集会では、松前中2年生が人権標語の発表や合唱などを行いました。また、生徒作品「あやまち」の詩を群読。相手を傷つけた言葉はなくならず、そのあやまちに気づいた時には遅いこと、しかし、一言謝ればやさしい気持ち生まれ、友情が見えてくることを伝えました。

記念講演では、陸上選手としてオリンピックに出場経験があり、現在は熊本市議会議員を務める松野明美さんが「人生が一番じゃなくていい」と題し、自身と息子の体験を語りました。

現役時代「勝つこと、一番になること」を目標に走り続けた松野さん。現役引退後、第2子に障がいがあったことを受け入れられず、世間から隠し続ける生活を送ります。しかし、地域の中で子どもたちが助け合って成長していく姿を見る中で気づいた「ビリでも素晴らしい人生が送れる」ということ。演台の前に立ち、小さな体の大きなジェスチャーで語り掛ける姿は、会場を感動で包み込みました。



①人権集会の様子
②講師を務めた松野明美さん
③松野さんの話に耳を傾ける会場の人たち



松前をひまわりで飾ろう ひまわりの種まきと苗の配布のお知らせ

松前町まちづくり塾(重松茂塾長)はまさきっポボランティアの協力のもと、5月18日、ひまわりの種まきを行いました。これは平成3年から続いている活動で、この日種まきされたものは、来月町民の皆さんへ無料配布します。重松さんは「町花であるひまわりがもっとあればと思い、子どもたちの協力を得て、この活動を始めました。町全体にひまわりが広がってほしいです」と話していました。



①発芽しやすい土の量を説明する重松さん
②「ひまわりがきれいに咲くといいな」

ひまわりの苗の無料配布 ※なくなり次第終了
6月7日(金) 9時～ 松前公園老人広場
品種：グッドスマイル(草丈40～50センチ)
1人5株まで。持ち帰る袋などは各自でご用意ください。
☎総務課企画政策係 ☎985-4103

pick up / 義農スピリット 早川かずし著 / アトラス出版

義農作兵衛が残した一粒の麦種が、奇跡を起こす一松前町名誉町民の坪内寿夫さん(来島どっく・元社長)の規格外の発想と謎の老人が元氣と勇気を与えてくれるファンタジー小説です。

松前町在住の著者が、町内の名所に触れながら、「義農精神」とは何かを問いかける一冊。興味のある人は、お近くの書店でお求めください。ふるさとライブラリーでも貸し出し中です。著者メール: gino.sakka.2013@docomo.ne.jp



お詫びと訂正：広報まさき5月号「新生活がスタート」のキャプションに誤りがありました。深くお詫びし、訂正いたします。
正) 3_初めての教室、新しい教科書にドキドキ(松前小) 4_緊張したけれど、きちんと返事ができました(岡田小)
5_両親、先生や上級生の前で誓いのことを言いました(岡田中) 6_入学式終了。「あー緊張した」とにっこり(北伊予小)